第148号　　R 5. 10. 13

その教頭

三重県公立小中学校教頭会
〒514-0003 津市桜橋２丁目142
教育文化会館別館３階
TEL 059 (228) 2340
FAX 059 (228) 2271
E-mail:mieheadt@hyper.ocn.ne.jp

重点取組

（単位教頭会より）

教頭が教頭であるために・・・我々の声を束ねたい

桑名市・桑名郡教頭会　桑名市立大山田西小学校　小　林　信　行

４月17日第１回教頭研修会終了後，「会長さん，聞いてもらっていいですか？」とある教頭先生が寄ってこられました。何ったお話は，あまりにも過酷な業務実態でした。第２回では，別の教頭先生から，悲痛とも言える現状が出されました。自分は教頭職６年目になりますが，この会で，これほどまでにしんどい状況が会議の場で出されたことはありませんでした。

会長の自分に何ができるのか・・・とっさに答えたことは，『実態把握のためのアンケート調査をすること』，『その結果を持ってまずは小中校長会会長に現状を伝えに行くこと』の２つでした。

４月当初，定数に対する欠員及び配置人数枠だけは現場に知らされているにも関わらず具体的な人員（学習支援員等）の配置がなかったという学校が40％（人数にして計22名／分校を含め40校中）もありました。また，今後欠員が予想されるあるいはその状況に向けて議論を始めているという学校の欠員総数は14名にも及びました。

アンケートに寄せられた「声」からは，厳しい実態の中，本当に我慢して日々の業務に携わってみえるのだということがひしひしと伝わってきました。「代替教職員がつかないからといって，安易に教頭が代わりをするということはなくしていきたい」という声。その一方で，「教頭が代わりをしなければ，先生方の持ち時間数が増え教職員が疲弊していき，ひいては子どもの教育にとって悪影響を及ぼしかねない，まさに悪循環が連鎖的に起こっていく」という声もありました。「こんな状況が続けば，教頭になろうと思う教員がいなくなるのではないか」という心配の声もありました。

桑名郡市小中校長会長とは６月１日に面談，アンケート集約も手交しました。校長会長は自校の教頭から「教頭会で何が話題になっているのか？」と事前に聞いてくださっており，既に小中校長会の挨拶の中で，「厳しい状況の中で業務に携わっている教頭がいること」，「代替教職員がつかないならせめても労いの言葉をかけてほしい」と仰っていただいたとのことでした。

自分は，このアンケート調査・集約のデータをもってして，働きかけられるところにはすべて働きかけていかなければとの思いを強く持ちました。市教委へも要望としてあげていきますが，他市町でも起こっている問題ではないかと考えています。調査部の方々にもお願いして，県教委への要請やその中で必要に応じて県から国への働きかけもしていっていただくよう強く要請してほしいと考えています。

我々教頭が教頭であるために・・・。

「何のためにするのか」を見つめ直す

員弁郡・いなべ市教頭会　東員町立神田小学校　伊　藤　幸　洋

１．はじめに

この写真は，地域の「朗読ひばりの会」の方に来ていただき，低学年に読み聞かせをしていただいている場面である。コロナ禍での制限の緩和が始まり，「何のためにするのか」「どのように取り組むのか」という活動の本質を確認しながら，教育活動を進めている。

２．教頭会の「基本的な研修課題」

学校を取り巻く社会情勢や教育改革の動向を的確に把握し，今日的な教育諸課題の解決に向け，教頭としての役割と対応及び解決方法を研究・検証するとともに，教頭同士の連携を深める。

（１）不登校対応

年々，不登校の児童生徒が増えている傾向にある。昨年度の学習会では，不登校児童生徒のために活用できる制度を知り，チーム学校がよりよく機能する取り組みを学んだ。

今年度は，多様な個性を持つ子どもたちに対して，小中一貫教育のシステムの中で教頭同士もより深くつながり，不登校児童生徒の社会的自立に向けて，関係機関との連携を強化することを学ぶ。

（２）教頭としての自らのあり方

様々な業務が集中する教頭職は，年度当初は目の前の仕事をこなすだけで精一杯になり，突発的な対応に追われる日々が続いていく。

「子どもたちのため」という言葉だけが前に立つと，取組が増える傾向が進む。教頭はもちろん教職員の負担が減れば，創造性を働かせやすくなり，教育活動は活性化する。「楽になる」ではなく「幸せになる」という視点で考えると，モチベーションが高まる。子どもたちがwellbeingな学校生活を送るためには，職員室もwellbeingであるべきである。

①学校運営に関する情報を正しく分析する。
②職務の「要点」を押さえて，積極的に行動する。
③すべての教職員が専門性を活かして活躍できる職場づくりをめざす。
④学校の組織を活性化し，教職員同士が切磋琢磨できる環境づくりを進め，教職員の資質向上・人材育成を推進する。
⑤地域や関係機関との連携を進め，学校の取組を外部へ発信する。

教頭としてできることを考えていきたい。

３．「員弁の教育の理念」を大切にしながら

教頭は，目の前の子ども・家庭・地域の実態を多面的に把握することを大切にし，「子どもたちにつけなければならない力」を明らかにし，課題解決に向けて取り組む。

教頭として，抱える課題や悩みも多くあるが，新たな６名の教頭とともに教頭同士の交流，連携を深めながら，課題解決に向けてともに支え合っていきたい。

「教頭会，心は一つ！」

四日市市小学校教頭会　四日市市立塩浜小学校　松　本　克　也

新型コロナウィルス感染症が５類相当に移行するとともに，ともするとコロナ以前の教育活動にそのまま戻そうとする動きがありますが，人口減少社会や超スマート社会の到来，持続可能な社会を実現するための開発目標に対する取組等々，新たな課題へ柔軟に対応できる子どもを育むため，新しい生活様式を踏まえた学校教育のニューノーマルを構築することが学校には

求められています。

四日市市では，「四日市市総合計画」「四日市市教育大綱」との関連を図った「第４次学校教育ビジョン」（令和４～８年度）が策定され，このビジョンに基づいて各校において「学校づくりビジョン」を作成・実施しています。

校長を助け，校務を整理し，必要に応じ児童の教育をつかさどる我々教頭は，社会の変化を敏感に捉え，このビジョンの実現に向けて，先を見据えた教育活動を展開しつつあるところです。

さて，四日市市小学校教頭会では，毎月１回，四日市市教育長の招集により職専免研修として，①教育委員会からの指示・伝達事項，②会務報告，③近隣校と教育活動について情報交換するブロック別研修（７～９名×５ブロック），④全公教や三重県公立小中学校教頭会の研究項目と一致させた研究推進委員会別研修（６～７名×６グループ）を中心に研鑽と横の繋がりを深めています。とりわけ，今年度13名の新しい仲間を迎えた本教頭会では，横の連携を図る研修の機会は大変有意義なものとなっています。

定例会の基本は午後半日開催ですが，６月と10月は１日開催の研修機会に恵まれています。１日開催月は，予め役員・理事会で協議し，我々が喫緊の課題に対応できるように研修内容を設定し，講師を招聘した講演会やワークショップ

等のプログラムを組んでいます。ちなみに今年度６月は，「誰一人取り残さない不登校対策」「学校の組織力向上に向けた教頭の役割」等の研修を持ちました。

この他，定例会以外の各研究推進委員会の日程は各委員会の判断に委ねられ，必要に応じて主体的な研究活動を行っています。教頭として判断に迷う場合は校長に相談することは勿論ですが，平素から横の繋がりを活用し，随時，情報交換や互いにOJTを行っています。また，各校のパソコンからアクセスできる教頭専用フォルダには，「お役立ち情報」や「各種研修データ」を蓄積し，教頭なら誰でも活用できるようになっています。

「教頭会，心は一つ！」これからも横の連携を図り，スクラムを組んで教頭職に邁進していきたいと思います。

「夢と志を持ち，未来を創るよっかいちの子どもたち」をめざし「自律」と「多様性」を育む

四日市市中学校教頭会　四日市市立中部中学校　大河内　智　子

四日市市の学校教育ビジョンでは，「夢と志を持ち，未来を創るよっかいちの子ども」をめざす子どもの姿とし，予測困難な時代においても，その変化にしなやかに対応する「生きる力」「共に生きる力」の育成をめざしています。私

たち四日市市立中学校教頭会は，月一回，集まり，教頭の立場から学校運営について研修するとともに，情勢や動向の把握，確認，情報交換を行い，自校の運営にいかしています。

本校では，四日市市の教育ビジョンを受け，学校教育目標「美しく生きる」を最上位目標に掲げ，「自律」と「多様性（共生）」を合言葉に教育実践をしています。「ただ言われたことをやる」「指示されなければ気づけない」生徒ではなく，自ら問いを見つけ，考え判断し，行動できる「自律」した生徒を育成する。そのために，生徒はどういうことを意識していくのか。同時に，個別最適な学び，協働的な学びが求められる今，教職員は自らの授業をどう改善していくのか。教頭はどう取り組むのか。それぞれ

が自らに問い，子どもも大人も，予測困難な時代の中で，生きてはたらく力を育成するために日々試行錯誤しています。

加えて本校は，外国人生徒をはじめ，多様な出会いが日常の中でできる学校です。その多様な中で，初めて相手のことを考えたり，自分の考えを整理したりする。考え方や答えが一つではないこと，ときに答えの出ないことを経験することもできます。自分と異なる他者との生活を通じて，「多様性（共生）」を学んでいる最中です。これからの時代をそれぞれが力を発揮し，活躍できる社会にしていくために，共に生きていくために「自律」と「多様性」を「合言葉」にして取り組んでいるところです。これらの実践を通して学校がより良き方向に変わっていく姿と，生徒，教職員がウェルビーイングでいる姿を今後，報告できればと思います。

本校の持ち味を生かし，「夢と志を持ち，未来を創るよっかいちの子どもたち」をめざします。

授業改善に向けて

三重郡教頭会　菰野町立竹永小学校　大矢知　正　裕

三重郡は，朝日町，川越町，菰野町の３町からなり，12の小中学校（小学校８校，中学校４校）があります。

菰野町（小学校５校，中学校２校）では，子どもたちが，学習内容を人生や社会のあり方と結び付けて深く理解し，これからの時代に求められる資質・能力を身に付け，生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために，これまでの学校教育の蓄積を生かし，学習の質を一層高める授業改善に取り組んでいます。学習者主体の基礎的・基本的な知識・技能の習得の徹底と子どもが「わかった」「できた」という実感が持てる授業の実践に心がけています。

本校においても，「わかった」「できた」が実感できる授業づくりをテーマに取り組んでいます。しかし，子どもたちの授業に参加する姿勢について落ち着きはあるものの，学習に対する苦手意識の払拭には課題が多いことが現状です。その中でも「どうせ勉強してもわからない」と途中であきらめてしまう様子が見られます。

そこで，研修主題を「学ぶことの楽しさを育む授業づくり～学ぶ意欲を引き出す手立ての工夫～」とし，子どもたちが学ぶことが楽しいと思えるよう授業力向上を目指しています。まず，授業で「めあて」「ふりかえり」を示しながら子ども目線からの授業の方向性とゴールがわかるようにすることを前提に，子どもにとっての「楽しさ」についてこだわろう，ということになりました。

子どもが学習するにあたり，授業の「楽しさ」とは何なのかを追求しました。

・今までわからなかったことが理解できた
・間違えても，教えてくれる仲間がいる安心感
・新しいことを知る楽しさ
・考えが広がる楽しさ
・実際に触れたり体験できる楽しさ
・自分の思いが通じる（思いを伝えられた）達成感　　等々・・・。

上記のことを，より具体的に，どのように授業に取り入れるかを話し合いました。お互いに聴きあえる仲間づくりや，子どもが考えたことや感じたことを様々な形でアウトプットできる場面をつくることなど，全体としての授業のあり方について確認しました。また，指導主事の積極的な活用を行い，さらなる質の向上に努めたいと考えています。

授業の大切さは誰もが意識するところですが，「学校として」の意思統一を大切にしていきたいと思いました。そして，今後の授業で実践したことをふまえ，子どもの学習状況を検証し改善を重ねていきたいと思います。

コミュニティ・スクールの実践

鈴鹿市教頭会　鈴鹿市立旭が丘小学校　奥　村　　仁

鈴鹿市では小学校30校，中学校10校あり，全校で平成23年度よりコミュニティ・スクール（学校運営協議会）を導入しています。学校運営協議会とは，学校運営について協議する機関であり，学校経営方針，学校関係者評価，及び学校や地域等の実態に基づいた教育課題について，熟議を大切にした共通理解・改善策の検討を行っています。そして，鈴鹿型コミュニティ・スクールとして，学校と地域との双方向の連携，鈴鹿の実情に応じた取組（内容は学校の実態に応じて多様），学校長が委員の一人として参加しています。

昨年度，鈴鹿市が市制施行80周年の年であり，市内全校で「鈴鹿市制施行80周年記念みんなで創ろう！レガシー事業」に，市内各校が地域の特色を生かして取り組みました。

現在，私の勤務校の地区には旭が丘地区まちづくり協議会があり，地域と共に進める学校づくりに取り組んでいます。本校学校運営協議会には，旭が丘地区まちづくり協議会の方が委員として参加されており，まちづくり協議会と共に進めるレガシー事業について，「笑顔満開！芝桜満開！旭が丘小学校」をテーマに，６年生児童150名，旭が丘地区まちづくり協議会から約10名の参加を得て，６年生の卒業記念を兼ねて約650株の芝桜苗を植えて芝桜花壇を拡充する取組を行いました。芝桜植栽のための花壇整備（除草，整地，防草シート，散水ホース等の設置）を行いつつ，９月に６年生が将来に残したい漢字一文字を６年生一人ひとりが考えて素焼き版にデザインして制作，11月に本焼きをして一人１枚の陶板焼きを，クラス毎にプレートに貼り付けて設置しました。このレガシー事業を進めるに当たっては，旭が丘小学校の学校運営協議会にて，何度も熟議を重ねてきました。

その結果，花壇改修や植栽時の補助など，旭が丘地区まちづくり協議会の皆様の多大なるご支援，ご協力のもとで完成させることができました。平成30年度から始まった学校敷地内への芝桜花壇が拡充し，このレガシー事業で整備した花壇は市道に面しているため，春の開花期に合わせて地域住民の皆様にも花見をしていただける環境が整いました。これは，SDG's の目標の11「住み続けられるまちづくりを」の実践にもなりました。

今後も市内各校において，学校運営協議会を核として熟議を重ねつつ，地域への愛着を育む取組を教職員や地域の方と実践し，地域と共に進める学校をめざす次第であります。

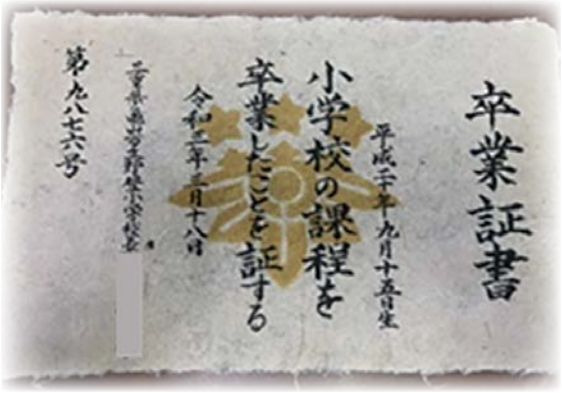
亀山っ子一人ひとりの可能性を引き出そう！

亀山市教頭会　亀山市立野登小学校　北　川　裕　己

亀山市は，鈴鹿山脈の麓に位置する自然豊かな地域です。令和４年３月に「亀山市学校教育ビジョン」を改定し，教育スローガンを「亀山っ子一人ひとりの可能性を引き出そう！」とし，基本姿勢を「豊かな地域資源とつながり，共に歩む」としました。令和３年度には市内の中学校３校と小学校11校の全てがコミュニティ・スクールとなり，14校がそれぞれの地域の協力を得ながら，各校の特色を活かした教育活動を実践しています。

私が勤務する野登小学校では，６年生が校区に群生するミツマタの木から紙を漉き，自身の卒業証書を作成しています。この野登小学校のふるさと学習の１つ「野登和紙みつまたプロジェクト」について紹介します。はじまりは平成18年，地域の方に紙漉き体験をさせていただいたことをきっかけに，市販の楮（こうぞ）を使って和紙をつくり，地域の書家の方に筆耕していただき完成しました。それから10数年続いた取組でしたが，地域の講師の方の高齢化により，継続が難しくなりました。そこで，令和元年に当時のＰＴＡ会長と職員が協働し，地域に群生するミツマタを使った和紙作りに挑戦しました。しかし，当時は，ミツマタの皮の繊維を細かくほぐす作業に多くの時間と労力が必要でした。その他にも卒業証書として文字を記すための和紙を作るためには多くの苦難がありましたが，それでも，どうすれば質の良い紙ができるのかと，当時関わってくださった地域の方やＰＴＡ役員ＯＢの方とともに試行錯誤を繰り返しました。そして，ついに100％野登産の和紙が完成し，卒業証書として子どもたちに手渡されました。同じ時期に，地域の「みつまたを愛する会」の方の指導の下，挿し木を行いミツマタの栽培を始めました。いつか学校で成長したミツマタを使って卒業証書を作ることを目指しています。そして，この卒業証書づくりを経験した子どもたちが本校の保護者となり，我が子の証書作りの協力者となる日も近づいています。この「野登和紙みつまたプロジェクト」は，学校・家庭・地域を繋げるだけではなく，世代を超えた大きな地域の宝となっていくと確信しています。

今後も，各校がそれぞれの地域の特色を活かした教育活動を推進していきます。地域との学びが子ども一人ひとりの可能性を伸ばし，そして，同時に地域の可能性を広げる活力となります。さあ，今年も和紙作りが始まります。どんな卒業証書になるかが楽しみです。ワクワクしているのは子どもよりも大人たちの方かもしれません。



「９年間の一貫した学び」への取組

津市北地区教頭会　みさとの丘学園　立　藤　真　弓

津市美里町にあるみさとの丘学園は，小学校と中学校の教育を一貫して施す義務教育学校です。統合前の各小中学校で大切にされてきた思いを引き継ぎ，平成29年に開校しました。子どもたちや保護者の方の声を大事にしながら私たち職員は９年間の一貫した学びに取り組んでいます。

義務教育学校の特色を生かし，「学びあい」「美里創造学習（人権教育を中心とし，９年間一貫した教育活動）」「英語学習」の学びに力を入れています。

「学びあい」では，わからないことが大切にされ，すべての子どもの学びを保障することを大切に，ペアやグループでの学びあいを中心に

行っています。児童生徒が主体となって考え，対話し，難しい課題の解決を目指しています。友だちの考えに触れることで理解を深めたり新しい考え方やアイデアを見出したりしています。また，前期課程（小学校）と後期課程（中学校）の教員の乗り入れ授業を実施することで，前期課程と後期課程の学習内容のつながりをつかみ，前期課程では先を見通した学習を，後期課程では前期課程における学びを踏まえ，より深まる学習を実践しています。

「美里創造学習」では自分たちの地域の歴史・文化・自然・産業を学び，体験学習や出会い学習等で地域の方の思いを知り，自分もこの美里を創る一人であるという気持ちを持ち，学習に取り組んでいます。また，自分も他者も大切にし，多様な人々と協働する生き方を目指した９年間の人権教育カリキュラムを作成し，１年生から４年生では自分や友だち，家族・地域のこと，５年生から９年生では社会の中の人権課題について考え，自分たちがどんな学級・地域・社会を創っていくのかを考える学習に取り組んでいます。また，交流発表会や文化祭で各学年が，学んだことを創作劇を通してみんなに伝える機会を設けています。

「英語学習」では，朝の10分間の英語タイムを設け，中学校の英語の免許を持つ教員と学級担任で授業を行っています。また，１年生から９年生まで，英語科の教員が「教科の専門性」を生かしＡＬＴと共に授業を実施しています。早期から英語学習に取り組んでいるため，子どもたちは恥ずかしがらずに英語を話そうとする姿が見られ，英語に対して抵抗感や苦手意識が少ない傾向にあります。

今後も子どもたちの可能性を信じて９年間を通した一貫した学びに取り組んでいきます。

人とつながる楽しさを　～姉妹校交流　新たな一歩～

津市中地区教頭会　津市立安東小学校　内　藤　　薫

津市において，１人１台タブレット端末の整備は令和５年度までの３年間で行われる計画でしたが，新型コロナウイルスの感染拡大のため，前倒しで令和２年度中に市内の全小中学校・義務教育学校に配置されました。そして，本年度は，「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた授業づくりを進めることで，「主体的・対話的で深い学び」を実現し，他者と協働しながら問題発見や問題解決に挑む資質や能力の育成を目指して，津市GIGAスクール構想を推進しています。

津市は上富良野町（北海道）が開基100年を迎えた平成９年（1997年）に友好姉妹都市提携を行いました。そして，上富良野を開拓し最初に移住した人物が本校区出身の田中常次郎さんであったことがきっかけとなり，同時に本校と上富良野西小学校が友好姉妹校となりました。それ以来26年間，本校と上富良野西小学校との間で姉妹校交流が行われています。３年を１サイクルとして，数名の小学生の代表者が互いに相手校を訪問したり，訪問のない年は作品等を送り合ったりしてきました。

令和２年度以後，コロナ禍のためしばらく中止になっていた訪問でしたが，今年は７月25日に，６年ぶりに上富良野西小学校４～６年生の代表者８名を迎えることとなりました。そこで，これまでコロナ禍で全校集会などZoomを活用

して行ってきたので，それを生かして来校する一部の子どもだけでなく，何とか両校の同学年の学級全員が交流できないだろうかと考えました。上富良野西小学校にそのことを伝えると，是非そうしましょうと快諾してもらうことができました。まず，Zoomミーティング会議で各学年の担任同士が事前に打ち合わせを行い，どんな内容でZoomでの交流をするのか話し合いました。

そして，いよいよZoomによる学級交流当日。画面に互いの学校の子どもたちが映し出されると，大きな歓声が上がり，自己紹介をしたり質問やクイズをしたり，時には笑い声も上がるなど笑顔で楽しいひと時を過ごすことができました。遠く離れたところで暮らす全く生活環境の異なる子どもたちが，オンラインを通して相手を身近に感じながら，互いに広く深くつながり合うことができたことは，どちらの学校の子どもたちにとっても，大変有意義な経験となりました。この出会いを新たな一歩として，２学期以降も互いの郷土の様子を紹介し合ったり，意見交流を行う機会をつくったりしながら，新たな交流の形を模索しつつ，更につながりを深めていきたいと思います。

私たちにとっての「働き方改革」をめざして

津市南地区教頭会　津市立久居東中学校　櫛　田　　誠

教職員の働き方改革については，働く環境を変える取組等を各校で進めています。これまでの働き方を見直すことで，人間性や創造性を高め，より効果的な教育活動を行うための取組です。

私たちのもとには働き方改革の現状を問う調査が届きます。それらへの回答を作成する時，働き方改革の対象である「教員」を，子どもたちに比較的近い教諭等のことを想起する自分がいます。しかしながら，「教員」には私たち教頭も含まれています。

教頭である私たち自身の働き方改革，とりわけ，時間外労働時間の縮減を念頭におき，「時間外在校等の客観的な把握」「部活動ガイドラインの一層の徹底」「会議時間の縮減」「ＩＣＴを活用した業務削減」等々の働き方改革の具体的な柱で業務を顧みると，個人としてできること，学校として取り組むべきこと，教頭会として取り組めることが思い浮かびます。

例えば，各学校で利用している「ＩＣＴを活用した業務削減のためのツール」を共有することができれば，みんなが便利になりますし，人事異動があってもツールの使いこなしに戸惑うことは少なくなると思います。また，会議時間の短縮･効率化や，業務の見直しについては，「どのように取り組んだら，新たにどんなことができる時間が創出できたか」を明らかにできると思います。また，意識改革としては，教頭は他の教員が退校しないうちは帰れない職種ではなく，校長先生や他の教員を頼りつつ，月２回の定時退校を実行することも大切かと思います。

教頭会は横のつながりのある私たちの居場所です。教頭会に集う私たちの知恵とスキルを結集する場としての取組を今後も進めていければと思っています。

津市立久居東中学校

地域とともにある学校づくり

松阪市教頭会　松阪市立豊田小学校　成　瀬　佐　和

新型コロナウイルス感染症が５類扱いとなったことで，学校ではさまざまな教育活動が制限なく行われるようになり，学校に活気が戻ってきたように感じます。松阪市教頭会においても，コロナ禍が一段落した今，学校の現状や日頃の取組について情報交換する機会を少しでも確保し，これまで以上に，つながり学び合うことを大切にしていければと考えます。

私が勤務する豊田小学校では，昨年度に学校運営協議会が設置され，コロナ禍の中でコミュニティ・スクールの活動をスタートさせました。新型コロナウイルスの感染拡大を心配しながらも，コミュニティ・スクールの活動に多くの地域の方，保護者の方々，そして校区の中学生にも関わってもらうことができました。コロナ禍で，人とのつながりがなかなか作れない中，「図書室リフォーム」，「学校BOUSAIデー」，「新聞記事について語ろうサミット」など，児童が自分の考えを作り，なかまや地域に発信する活動の中に，学習支援ボランティアとしてたくさんの方に入っていただきました。そして，学校支援ボランティアの方から，「がんばっとるね」「それでいいよ」といった温かい言葉をかけてもらうことで，子どもたちは安心してなかまと学びを深めることができたように思います。

今年度，子どもたちや保護者，地域の方の手でリフォームした図書室にもっと人が集まり，新しいつながりができるような活動が何かできないかと学校運営協議会で協議し，始まったのが「本の宅急便」の活動です。「本の宅急便」とは，子どもたちが読みたい本をリクエストすると，選書ボランティアの方がその子どもにあった本を選んでくれ，その本がその子どものもとに届くという活動です。「元気になる本が読みたい」「海が好きだから，海のことがわかる本が読みたい」といったリクエストがたくさん寄せられ，選書日には図書室にたくさんのボランティアの方が集まりました。一枚一枚丁寧にリクエスト用紙に目を通し，届いた本を手に取った子どもの嬉しそうな顔を思い浮かべて本を選んでくださいました。「この子はきれいな字を書くし，文章がしっかりしているから，これくらい字が多い本でもいけるかな」「この子は元気がないみたいだから，色彩が多い絵本がいいと思う」といった意見を活発に出し合いながら，選書の作業は進められていきました。

本が決まると，ボランティアの方々で，その子どもにあてた手紙を書き，手紙を入れてきれいに本を包み，リボンをかけてプレゼント風に仕上げました。その本のプレゼントを，図書委員会と地域委員会の子どもが各教室に配達しました。本を手に取った子どもは大喜びでした。その後，「かぞくみんなでたのしくよんだよ」「またたのみたいです」といった，子どもたちからボランティアの方々に向けた手紙がたくさん図書室前のポストに入れられました。この取組を通して，今までになかった新しいつながりが生まれたことを嬉しく思っています。

子どもたちが地域でつながりを作り，安心して自分らしさを発揮していくことができるように，これからも地域の方や保護者の方と協働して，魅力ある学校づくりを進めていきたいと考えています。

多気郡教頭会の取組

多気郡教頭会　多気町立勢和中学校　大　原　　聡

多気郡教頭会は，多気町，明和町，大台町の学校で構成されており，総勢19名の教頭が所属し，活動している。今春４年ぶりに全員参加での定期総会を開催し，今年度の活動方針及び事業計画を審議し，研究部と企画部の活動を主な取組として実践することを確認した。

研究部では，「21世紀を築く学校教育の創造と教頭のあり方を考える」をテーマとし，３町から２～３名の教頭が参集し重点課題について研究を進めてきた。昨年度の研究部会の活動は，各町の研究部員を中心として課題を洗い出し，３町教頭会において，その課題における各校の現状や取組について情報共有するなどしてきた。どの学校にも個別の教育的ニーズへの対応等，特別な支援が必要な児童生徒が存在しており，すべての児童生徒の個別最適化された学びの保障を目指し，教頭として，どのように教育環境を整え，支援体制を構築し，学びを保障していくかが課題となり，多気郡全体で協働研究を進めることとなった。多気郡の教頭は３町内での異動が多くあり，町をまたぐとその組織や体制が異なることから，その対応に戸惑うことがある。今年度は，各町の教頭会において，不登校・いじめ・虐待事案等のさまざまなケースを想定し，検討会を行った。今後は，教頭会で学習したことを生かし，教頭としての役割を意識して，ケースマネジメントを含めた研修を各校で行っていく予定でいる。

企画部では，「会員の研修の充実に寄与する事業を企画する」をテーマに，日常の校務に追われる中，なかなか校外に研修に出る機会の少ない教頭の研修のあり方について活動している。ちょうど４年前，教頭１年目の秋に，県外小学校の道徳教育の研究発表会に参加させてもらい，とても新鮮な研修であったことを今でも覚えている。翌年から新型コロナウイルス感染症の感染拡大により，県外への移動はもちろん，参集型の研修会も実施できなくなった。今年度は，コロナ禍において開催がなかった「県外研修」の再開を軸にして，夏以降に実施される「研究発表会」を公開している学校について，県外の情報を集める活動をしているところである。研究部，企画部の取組は秋以降に，それぞれ研究発表会，県外研修という形で表れるが，どのような成果が出せるか，とても楽しみにしている。

ICTの活用による情報共有について

伊勢市教頭会　伊勢市立みなと小学校　奥　井　　守

はじめに

気象庁のHPでは，情報を自分の市町村に絞り表示することができる。必要な情報を素早く入手し，行動できるようにするためである。６月の大雨の際には，本校も児童の保護者への引き渡しなど緊急の措置をとった。その際に，教職員で情報の提示方法について確認した。

教頭の職務の一つは災害時だけでなく，日常の中で教職員が必要な情報を容易に共有し，協力して教育活動を進められるようにすることである。

本校での取り組み

①　欠席者の情報共有

毎日の欠席者の情報を大型のテレビモニターで提示している。校支援（昨年度から導入された伊勢市の校務支援システム）では，全学年のその日の欠席者を一つの画面で見ることができる。

私自身も含めて新しく赴任した教員にとって，児童の情報は私たちに欠かせない重要な情報である。

② 研修と体験学習の情報の整理

研修や子どもの体験活動の情報を項目別に整理し，紙媒体で保存している。

教職員の資質の向上につながる研修や様々な体験の機会についての情報は，とても大切な情報である。

③ グーグルクラスルーム・ロイロノートの活用

教職員間の校務分掌や学校行事についての連絡手段として活用している。

④ スケジュール管理

出張や研修，会議の予定を教頭が校務支援のスケジュールに入れる。教員は各学年の行事や，校務分掌に関わる取組について校支援のカレンダーに書き込んでいる。

今後について

今後もICTを活用して，より教職員が必要な情報を容易に共有し，協力して活動できるように，校内で工夫していきたい。

現在，教員の研修についての情報は，紙ベースで綴じている。大量の紙の束を開けて必要な情報を見つけることは難しい。いずれは，教員が自分の分掌や研修のテーマに沿って必要な情報を手に入れたり，目の前の子どもたちの実態に合わせて，体験学習の機会を見つけ，申込ができるようにしたりしたい。また，災害等の情報や伊勢市全体に関わる情報については，他校，伊勢市や教育委員会等とも連携し，一度誰かが入力した情報を，すべての教職員が素早く手に入るようにしたい。

今後，伊勢市の小中学校の教頭会でも，ICTの活用方法について話し合い，よりよい情報の共有方法について考えていきたい。

↑研修等の情報綴じ　↑欠席連絡モニター

教頭会のつながりを児童生徒の成長につなげる

度会郡教頭会　度会町立度会中学校　春　木　淳　志

度会郡教頭会は，玉城町，大紀町，南伊勢町，度会町の18小中学校の教頭で構成されており，年間３回の研修会を行っています。日頃の困り感を共有したり，各校の取組を交流したりしています。さらに，「虐待」「GIGAスクール構想」「学力向上」などの今日的課題について，講師の先生を招いて学習し，教頭としての資質向上に努めています。

それぞれの町にも教頭会が組織され，独自の取組を進めています。教育委員会，町防災課と教頭会が，防災教育，町防災の課題について話し合っている教頭会や，学校視察会を実施して生徒支援の在り方を検討している教頭会があります。

所属校においては，教育課題解決のために工夫と努力を続けています。郡教頭会や町教頭会での研修や情報交換で学んだことを参考にしながら，各教頭が工夫した取組をすすめ，児童生徒の成長につなげたいと考えています。

私が勤務する度会中学校は山間部にあるため，津波リスクは高くはありません。しかし，今後，度会町を離れて生活を送る生徒たちも多いと思われることから，地震や津波についての知識や身を守る方法などを知ることが必要です。また，度会町は宮川やその支流の洪水，土砂災害の心配があるため，危険箇所の理解や避難所生活について考えておく必要もあります。

そこで，他市町で重点的に取り組んでいる防災学習を参考にしながら，防災について全校で考える学校防災デーを設定しました。全校で地

震避難訓練をした後，各学年に分かれて防災学習を行いました。学習内容は，発達段階を考慮して，１年生は防災講話，起震車体験や住宅耐震化実験を通して，地震や津波について詳しく知るとともに身を守る方法を学びました。２年生は，非常時の具体的な場面を想定して，その時，どのような行動をとるか話し合う「クロスロード」という学習をしました。３年生は，避難所運営ゲーム（HUG）で，避難所で起こる問題をよりよく解決する方法について話し合いました。

今後も教頭会のつながりを大切にし，そのつながりの中で学んだことを生徒の成長のために活かしていきたいと思います。

インシデント・プロセス法を用いた事例検討会

鳥羽市教頭会　鳥羽市立鳥羽東中学校　小　林　元　佳

鳥羽市教頭会は，小学校７校，中学校４校の計11校で構成されています。また，県内で唯一，鳥羽市の離島には，小学校が３校，中学校が２校あります。ほとんどの小中学校が小規模校で，地理的条件等により学校によって課題に違いがあります。

そんな中でも，学校規模にかかわらず特別な支援を必要とする児童・生徒が一定数おり，一人ひとりの教育的ニーズを把握し，適切な指導と必要な支援を行う必要があります。

昨年度より本会として，特別支援教育に関わって，「教頭の役割」「教頭として取り組むべき課題」などについて研究してきました。今年度もその研究を踏襲し，各校の現状や教頭職として実践したことを発表し合い，成果や課題，取組の共有を行ってきました。その中で事例検討会の手法として「インシデント・プロセス法」が挙げられ，各校で取り組んでいるところです。

～インシデント・プロセス法とは～

インシデント（実際に起こった出来事）をもとに，提供者からの事例に対して，参加者が質問をしながら出来事の背景や原因となる情報を収集し，問題点の理解を深めるとともに，背景や原因等を明らかにしつつ，具体的な問題解決の方策を協議していく手法です。

課題解決のための判断力や問題解決力を養う

ことができ，情報の収集や分析の重要性を理解できる等の効果が期待されます。

実際にこの手法に取り組んだ結果，次のような成果と課題が明らかになりました。成果としては，「事例を提供する担任が，最終的に具体的なかかわり方を得ることができるので通常の事例検討会より効果的であった」「参加者全員が当事者として積極的に問題の解決策を考えることができた」等がありました。また，課題としては，「グループで司会をするリーダーの力量を高める必要がある」「個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成が十分でなかった」等がありました。

今後も各校の取組を交流し検証していくことで，子どもたち一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた学びの充実を図っていきたいと思っています。

志摩市教頭会の取組

志摩市教頭会　志摩市立磯部小学校　越　山　弘　之

志摩市教頭会は，中学校６校，小学校７校の教頭計13人で構成しています。

年間８回開催し，全体での報告・協議・連絡および校種別，中学校区別での情報交換等を行っています。

また，今年度は，志摩市教育委員会事務局副参事による「今日的な教育課題について」の講演会や，志摩市役所総務部籍弁護士を招いての

「小中学校の教頭を対象にしたいじめ・不登校への対応及び児童生徒とのかかわりについて」の研修会を行いました。「いじめ」の具体的な事例をもとに「望ましい初期対応とは何か？」「学校として，法律上すべきことは何か？また，教育上すべきことは何か？」について考えたり，「不登校」は「取り巻く環境によって，どの児童生徒にも起こり得る」ことをふまえ，効果的な対応について意見交流したりしました。日頃からあらゆる事態を想定し，いざという時にどのように対応すればよいのかを事前に校内で，確認しておくことが大切であることを再確認することができました。

こうした研修だけでなく志摩市教頭会では，教頭としての業務や今日的な教育課題等の情報交換をとても大切にしています。今年度５月，新型コロナウイルス感染症対策が緩和され，これからの様々な学校行事の在り方について，新

たな見直しが必要になってきています。今後も引き続き，日々の学校運営で悩んだり，調整等に困ったりした時，教頭会のよき仲間の存在が，一人ひとりにとって大きな支えとなっていけるよう，活動を進めています。志摩市の児童生徒が誰ひとり取り残されることなく学び続け，豊かに成長できるよう，私たちはこれからも一層連携を深め，情報交換を行いながら取組を進めていきたいと思います。

「横のつながりの大切さ」を意識しながら

伊賀市教頭会　伊賀市立柘植中学校　福　岡　信　吾

伊賀市教頭会では，28人の会員が「横のつながりの大切さ」を意識し，情報のやり取りをお互いにし，教育委員会のご理解を得ながら年間９回の教頭会研修会を中心に活動を行っています。研修会では，各校の教頭の業務に関する悩みを中心に出し合い，話し合っています。例えば，講師謝礼に関する源泉徴収の仕方やインボイス制と教頭の業務の関連性についてなど「ふとした疑問」も，みんなで受け止め，知恵を出し合い，業務の効率化の一助になるよう研修を重ねています。

また，「教育研究部会」「経営研究部会」「法制研究部会」の３つの部会に分かれ，テーマ別の取り組みを行っています。そして，それぞれ

＜市内小学校での引き渡し訓練の様子＞

が研究した内容については，全体の場で共有し全員の学びとなるようにしています。

また，新型コロナウイルス感染症のために休止していた，事務職員との懇談会も本年度から再開しました。懇談会は共同実施の３つのグループに分かれ，共同実施の執務室を見せていただくとともに，その業務内容等詳しく教えてもらいました。また，簿冊等の共同して扱うものについて，事前に意見を出し合ったものをもとに，さらに使いやすいものとするため話し合いを行いました。普段，つながりの深い事務職員さんとあらためて話をすることにより，今後，お互いの業務がより有意義なものとなることが期待されます。

さて，昨年度は,12月２日（金）に三重県公立小中学校教頭会研究大会を伊賀市主催で行いました。当日は，皆様のご協力のおかげで無事に終えることができました。ありがとうございました。

本年度も，第45回研究大会が行われます。その発表に向けても昨年度から着実に準備を続けています。テーマは「緊急時・災害時における児童生徒の引き渡しについての見直しと課題の検証」としました。「誰もが発表できる取組」「今

後，各校で参考にできる取組」とするため，全員でテーマ設定，アンケート調査，分析を議論しました。そして，結果を各学校に持ち帰り，これまでの計画を見直すなどの改善に繋げました。当日はこのことについて分科会にて発表し，ご意見をいただきたいと考えています。

予期できない緊急事態のもとにおいても，子どもたちを確実かつ安全に保護者に引き渡すことができるよう，研究大会での学びを各校の取組に活かしていきたいと考えています。

点を線に，線を面に　～教頭どうしのつながりを大切にして～

名張市教頭会　名張市立百合が丘小学校　山　本　優　子

名張市教頭会は，中学校５校，小学校14校の計19校の教頭で構成されています。

年間８回開催する教頭会では，前半は全体で報告，協議，連絡等を行い，後半は５つの中学校区での情報共有の時間をとっています。中でも，前半の議事の中に位置づけてある情報交換では，「熱中症対策をどうしているか」「PTAの活動について学校はどんな関わり方をしているか」等々，各校で悩んでいるが電話をかけて尋ねるには遠慮してしまうようなことを話題に挙げて情報交換をしています。

また，１年間の研修会の中で，教育長講話を設けて名張市の教育課題について共通理解する場を持ったり，退職された先生にお話を伺い，学校経営への関わり方について日々の業務を振り返る機会を作ったりしています。

今年度の教育長講話は，特に，名張市の児童生徒の現状から打ち出した施策について，具体例を挙げて話していただきました。

例えば，小学校全校に教科担任制を導入することで，教材研究の深化，専門性を持つ教師の熟練した指導による授業の質の向上だけではなく，チームとして児童にいろんな教師が関われること，また教師の持ちコマ数の軽減や授業準備の効率化等による教師の負担軽減など，一面だけではない効果を目指し，その成果も出ていると話していただきました。

また，名張市の課題である不登校（長欠）児童生徒に対する取組においては，「緊急」「短期」「長期」の対策を考え，教育長自らが機関に足を運ばれ，家庭と学校の間の場所として，「放課後子ども教室」の設置に至ったと聞かせていただきました。コロナ禍の影響もあり，全国的に不登校児童生徒が増えている中で名張市も例外ではありません。登校しにくい子どもや引きこもってしまう子どもが増えている中で，学校だけでの対応は難しく，教育と福祉の連携を深めることや適応指導教室で新しい取組を始めるなど，様々な施策を打ち出しています。講話の中で学校現場にいくつかの示唆を与えてくださったことを我々が持ち帰り，各校での実践につなげています。

私たちは，目の前の児童生徒の現状や，保護者や地域とのやり取りに一喜一憂してしまうことが多くありますが，教頭会の仲間どうし，一人ひとりの「点」をつなげて「線」にし，さらにつながり「面」として名張市全体の教育の質の向上を図りたいと考えています。そして，多方面からの正しい情報を知ったうえで，より一層連携を深め，目の前の児童生徒のために私たちができることを考え合っていける教頭会であり続けたいと思います。

未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくりをめざして

紀北教頭会　尾鷲市立向井小学校　小　島　敏　克

紀北教頭会は，尾鷲市，紀北町の小学校13校，中学校６校から構成されている。２市町については，今後も人口推計では人口の減少が進んでいく地域であり，必然的に子どもの数が減って

いき，学校の休校や閉校が年々進んでいくことが予想される。

このような現状の中，「未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくりをめざして」が，令和５年度紀北教頭会の研修テーマとなった。

各学校においては「特色ある学校づくり」を推進してきている。特色としては，地域にある資源を活用しての取組が多く行われてきている。本校については，尾鷲市水産農林課からの出前学習として，丸太を組んでの筏づくり，アオリイカの魚礁づくりや食育，防災危機管理課と協働しての地域住民との資機材訓練，炊き出し訓練などがあり，尾鷲の清流を守る会での稚アユの放流は毎年の恒例となっている。高齢者とのしめ縄づくりについては17年間続く伝統行事にもなっている。これらの体験的な取組は，今後の紀北地域の未来を担う子どもたちに有意義であるといえる。

今後の課題として，いかに「特色ある学校づくり」を発展させていくかが求められる。児童生徒，保護者，地域住民のニーズに応え，学校経営としての根本的な部分での変革が必要となってきているのではないかと思われる。例えば，教科担任制を取り入れ学校経営を行う学校，一人ひとりの児童生徒に応じた合理的な配慮を徹底して推進している学校等，学校の特色を前面に掲げていく必要があるのではないかと考える。

そのためのツールとして，一人一台端末を使い児童生徒が「わかった，できた」という充実感や達成感をもつことができるよう授業改善を進めていかなければならない。各学校の状況により，授業改善のかたちに違いはあるが，児童生徒のための学校であることを意識して「主体的，対話的で深い学び」につなげていくことが「未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくり」につながっていくのだと思う。

「情報を共有し，課題解決に向けて前向きに取り組もう」

紀南公立小中学校教頭会　熊野市立木本中学校　仲　森　　久

令和５年度の紀南教頭会総会は，各市町教育長，施設関係者のご理解とご支援をいただき，５月16日(火)に参集型で実施しました。その際の挨拶で，次のように述べさせていただきました。

「今年度，紀南教頭会は，11名の方に加わっていただき，スタートしております。11名の方の中には，紀南の学校での勤務が初めての方も多くおられると聞いています。新任の教頭先生にとって，赴任から今日まで，教頭としての業務に戸惑うことも多かったのではないでしょうか。私自身も昨年度，新任であり，わからないこと，至らぬことの連続でした。そんなときに，近隣または市町を超えて，先輩の教頭先生方からご助言をいただき，また同期の教頭先生方には悩みを聞いていただきながら，何とか１年間を過ごすことができました。５月11日に行われました県教頭会総会の大会宣言に記載されていたように，『教頭会　心は一つ』の合い言葉が，身に染みた１年でした。さまざまな教育課題に向き合うために，教頭としてお互いにアイデアを出しあい工夫を共有しながら，課題解決に向けて前向きに取り組んでいきましょう。本日の総会がその第一歩になることを確認させていただき，挨拶とさせていただきます。」

各学校の教頭が情報を共有し，前向きに課題解決に取り組む姿は，貴重なリーダーシップとして紀南地域の教育の発展に欠かせない存在です。連携と協力を通じて，ベストプラクティス

を共有し，課題を解決することで，学校全体の教育レベルを向上させることができます。教育現場のリーダーとして，互いをサポートし，助けあいながら，より良い学びの環境を築いていく姿勢は，教職員や生徒にとっても大きな影響を与えます。

今年度は，各校の舵取りをする教頭先生方が紀南の地で“繋がり”，生き生きと充実した日々を送れるよう，紀南教頭会として，できる限りの活動を推進していきます。

夏季教頭会研修会で学んだこと

三重県公立小中学校教頭会調査部

令和５年度夏季教頭研修会は，４年ぶりに全員参集という形での開催となりました。第一部は，三重県教育委員会小中学校教育課谷本博史課長補佐兼班長による「県と国の今後の施策を踏まえた所管事項 等」についての講演でした。国や県の指し示す方針や施策を具体的な取組例を挙げて教えていただき，今後の学校運営につながるヒントとなりました。その中で，①子どもたちが主体的で対話的な活動を通じて，深く学び合うことができる授業づくりが大切であること②「個別最適化」された学習が「孤立した学び」とならないように留意すること③これまで積み重ねてきた教育実践とICT活用のベストミックスを考えることが大切であることについて詳しく学ぶことができました。またICTの利活用が進む中でインターネットの情報が正しいのかどうかを判断する力を粘り強く指導することの大切さにも改めて気づかされました。私たち教頭にとって，これからを担う教職員の育成も重要なテーマです。まずは，私たち教頭が学び続けることから始め，その姿勢が教職員に広がるよう職場の雰囲気づくりに努めたいと思いました。

第二部は，前 津市立敬和小学校長，現 津市人権・同和教育研究協議会外岡博明事務局長による「学校に何ができるか～外国につながる子どもたちの教育保障を中心に～」についての講演でした。敬和小学校では，外国につながる児童の在籍率が年々上昇する中，全職員で様々な機関と連携しながら取組を進めてきたことについて教えていただきました。「言葉」「生活習慣や価値観の相違」「保護者への対応」等の学校における課題や「学力保障」「進路保障」「偏見・差別」等の外国につながる子どもたちが抱えている課題等に向き合い，試行錯誤する中から取組の方向性を見つけ出し，「心配しなくても，子どもたちに任せておけばいい。子どもたちは

すごい力を持っている」という答えにたどりついたというお話には，とても勇気づけられました。改めて，「互いの違いを認め合い，尊重できる仲間づくり」を各学校ですすめていく必要があると強く感じることができました。外国につながる子どもたちが多く在籍していることは，子どもたちにとって「『多様な言語・文化・生活習慣・価値観に出会うことができる』『多様な人々と協働して生活することを，日常的に経験できる』『多文化だけでなく，互いの違いを認め合い尊重する共生の考え方を，自然に身につけることができる』等，『メリットしかない』」という外岡先生のお言葉は，私たちの心に深く刻まれたのではないかと思います。

４年ぶりに全員参集した中での夏季教頭研修会に参加して，改めて県教頭会という組織に属する仲間とともに学び，有意義な時間を過ごすことができたことは，明日からの仕事の活力につながりました。お二人の先生方，本当にありがとうございました。